

令和4年度すくすく泉事業 実績報告書

(団体名：NPO 法人 いずみの会)

【事業名称】
「すくすく泉」事業
【事業理念】
<ul style="list-style-type: none">・ 保育・ひろば(一時預かりを含む)を2本柱として、地域子どもたちが地域みんなに愛されて育つ場をつくれます。・ 樹木に囲まれた自然空間や泉文庫の豊富な絵本等の蔵書を活かして子どもの感性を育み、そこで過ごす子どもにとって、楽しく豊かな原風景となる場をつくれます。・ 地域の中の多世代の交流を大切に、子育てを通してみんなが豊かな時を過ごし、子育ての不安感、負担感、孤立感を軽減し、相談しやすく、様々な子育て情報を得られる場をつくれます。
【事業内容】
<p>【子育てひろば事業】</p> <ul style="list-style-type: none">・ 乳幼児親子の日常的な居場所として、育児不安の支えとして、地域とのつながりの入り口として、誰もがホッとできる心地のいい場の提供。・ 多胎育児、低月齢、特別な配慮が必要な子、転居間もない親子、外国人の親、祖父母育児、など、さまざまな育児のスタイルがあり、それぞれが抱える不安がある。どんな親子にも寛容な場であり、気軽にきてホッとでき、安心して過ごせる、心も体も健やかな子どもが育つ場の提供。・ 手作りや木の温かみのあるおもちゃで遊び、いずみ文庫でいい絵本に触れ、隣接の公園でのびのび外遊びをし、自然を身近に感じるなど、子どもたちが安全に楽しく過ごし、みんなで育つ場の提供。・ 親同士の自然な出会いや支え合いができるようなはたらきかけをし、孤立子育てからの脱却、共に支えあう子育てを促す。・ 子育て関連情報がワンストップで手に入る、また、利用者のニーズに合わせて紹介し地域へつなぐ役割。内容によっては専門機関へつなぐ役割をもつ。・ 子育てに役立つ講座や、子育てを楽しむイベントを、対面とオンラインを内容や月齢などにより活用して開催。・ 専門機関とのネットワークにより子育て関係の知識を支えるプログラムを企画。・ 地域の人々や他団体との連携によるイベントや講座の開催。

【一時預かり事業】

- ・保護者の育児に伴う精神的および身体的負担の軽減のため、理由を問わない一時的な預かり保育を行う（1～6時間、0歳は～4時間）。事情により緊急な預かりにも対応。
- ・以下の3点を重要な骨組みとした考えは一貫して変わらない。
 - * 命を守り無事にお返しする。
 - * 安心して保護者を待てるような子どもの心の安定。
 - * 安心して子どもと離れていられるような保護者からの信頼。
- ・コロナ禍の対応として、同時間帯に5名の定員を3名に減らし、早朝、夜間を時短、宿泊対応は休止など、制限をかけた上で、預かりが必要な親子ができるだけ利用できるように継続。家族に体調不良の人がいる場合や濃厚接触者がいる場合なども利用を遠慮していただくなどのお願いをしている。
- ・外国籍、障害などで利用をためらう方にも、丁寧なコミュニケーションにより安心して相談してもらい、できるだけ利用につながるようにしている。そのためにスタッフの質の向上と情報共有を大切にしている。

【小規模保育事業】

- ・A型1年目をスタートさせ、常勤保育士を中心に、一人ひとりの状況に合わせた保育を展開した。特に今年度は障害児や家庭的に配慮が必要な子どもを含め、より丁寧な読み取りと対応が必要であった。
- ・基本方針と保育目標は変わらない。
保育の基本理念基本方針
 - * 一人ひとりの子どもを愛し、尊重します。
子どもが最善の利益とその権利を尊重され、心身共に健康で、未来を創造する基礎が育つよう、チームワークを活かして保育する。
 - * 乳幼児期を豊かにするために家庭と連携します。
人間性の土台が育つ大事な時期として、それを十分認識して子育ての喜びを共有し、乳幼児期を豊かに生きるために保育者と保護者が連携していく。
 - * 地域から生まれ、子どもをまん中に地域が支え合う関係づくりをめざします
地域の自然や様々な物的・人的資源、文化を保育に活かします。また、子育てを通して多世代がつながりを深める拠点となり、地域全体の福祉や家庭支援に寄与していきます

保育目標

- * 自分が好き、みんなが好きなこども
- * 心も体も健やかな子ども
- ・子ども一人ひとりの心と身体の成長発達を保障する。
- ・保護者の気持ちに寄り添ったコミュニケーションを重ねる。また、情報が氾濫する世の中で、私たちが子育てで大事にしている基本的な考えを、折に触れて情報発信してきた。また運営委員会では、保護者代表が対等に意見を出す機会を通して、よりよい運営をつくる立場でかかわってもらう。
- ・多世代、地域の子育て家庭、近隣の園、小中学校など、地域とのかかわりをひろげる。（昨年よりは拡大）
- ・保育者の資質向上と保育の質を高めるための研修をする。
- ・常勤保育士の採用を進め、保育運営をスムーズに行えるようにし、働きやすい環境づくりを進める。

【新型コロナウイルス対応】

- ・消毒は厚生労働省のサイトを参考に、アルコール、次亜塩素酸ナトリウム、界面活性剤を用途に応じて使用し、新型コロナウイルスに効果のある方法をとっている。
- ・24時間換気システム、窓開け、空気清浄機を使用。
- ・職員用に抗原検査キットを用意。（濃厚接触者などの職場復帰前検査などに使用）
- ・一時預かりの送り迎えは、入室させず玄関で受け渡しを行っている。
- ・ひろば利用は、玄関ゲートの外で、検温、消毒を確認し、家族を含めた体調などの口頭確認をし、さらに、混んできたら公園に出るか早めに帰ることをお願いして了承を得たうえでゲートを開け、入室としている。密を避けるため、午前、午後で利用年齢を分けることは継続中。
- ・保育室へは、ひろばとの動線を分けて、公園側を迂回して入るようにしている。
- ・職員や利用者に感染者が出た場合の対応マニュアルを用意している。

【事業効果・波及効果】

【子育てひろば事業】

- ・今年度は「夫婦、子育て仲間、多世代交流…共に子育てを楽しもう」、「子どもの発達についてみんなで学ぼう」について意識しながら、可能な限り対面での関りを進めてきた。
- ・今年度も一時預かりスタッフ2名が、新たに保育士資格を取得した。

「はじめてのひろば」（月1回）

はじめていずみのひろばを利用する妊婦～12か月を対象に、予約制でひろばの紹介をする日を継続。予約をしたので確実に迎え入れてもらえるし、参加者がみんな初めての方だと思うと、第一歩のハードルが下がる。いずみのひろばのなりたちの説明や、利用の仕方だけでなく、市内の他のひろばの情報も提供。「ひろば」利用で得られることについて伝える。こんなときは「ひろば」がある、ということを知ってもらうことが目的。今年度も、これをきっかけに日常の利用につながった例はたくさんあった。

「Tomony」（月2回）

- ・父親も参加しやすい土曜日に、父子または家族で参加できるプログラムを開催。Tomonyは「共に」の意味で、夫婦で共に、家族で共に、子育て仲間と共に、地域と共に、など、子どもを育てるのは母親一人の役割でもないし、また、母親だけの楽しみでもない、というコンセプト。
- ・内容はかつての「パパ講座」や「防災講座」、「コンサート」などを含む、様々なプログラムで構成。年間24回あるうち、3回参加毎にファミリーフォトフレームがもらえるなど、参加を促す楽しみもある。育休や積極的参加の父親も増え、参加内容についても満足度の高いものとなった。
- ・例えば「絵本」の会や「手遊び」の会では、子どもの発達の知識と共に遊びの大切さを伝え、受講後、家でも積極的に子どもと遊ぶパパたちの姿をママたちが伝えてくれた。
- ・また、「パパのための離乳食講座」では、離乳食期の哺乳類の発達変化を見逃すのはもったいない！という管理栄養士の話により、「自分も参加したい」という父親の興味を引き出せた。
「いざという日は明日かもしれない」防災講座では、公園の防災トイレやかまどベンチなどの組み立て見学と、防災課の講座の後で、参加者同士で過去のママ部活の議事録などをもとにフリートークをした。自分たちで家族を守るという防災意識を高めることができた。早速簡易トイレを備蓄したという声も多く聞こえた。

- ・公園でみんなでピクニックとして、ゲームをしたり、保育園で提供している給食のスープを味わったりと、コロナ禍ではなかなかできない、食べながらのコミュニケーションを、野外で家族単位のレジャーシートで行い、とても盛り上がった。

「すくすくタイム」(週2回)

- ・発達に不安があり育てにくさを感じている親子も過ごせるインクルーシブなひろばのための相互理解を深める取り組み。週2回のプログラムを日常のなかに遊びとして取り入れ、子どもの姿を見ながら保護者とともに学んでいった。
- ・火曜日は感覚刺激をテーマに、「触感」「バランス感覚」「力加減」「ボディーイメージ」などに関する刺激を得られる遊びの紹介。片栗粉スライム、滑り台、バランスボード、トンネルくぐりなどなど…。保護者は、このような遊びが発達にどのように関係しているのかを知る機会となる。
- ・木曜日はわらべ歌などと発達刺激の話をむずびつけて解説。実際に親子で遊びながら、最近の子どもの様子や心配事などを話す時間。

両日とも、盛り上がって1時間以上になるときもあれば、あっさり終わることもある。だが、誰もが興味があり、心配もしている子どもの発達についての正しい知識を知ることにより、発達段階にそぐわない期待を押し付けたり、他の子と比べて悩んだりしていたのでは?と自ら気づいたというコメントもあった。

さらには、療育に通っている子たちの保護者は、子どもがみんなと一緒に遊ぶことによって刺激を受け、少し参加できうれしかった。子どもが求めている遊びのヒントを得られた。という感想をもらった。

- ・離乳食講座、保活の話、は、今年度も「境おやこひろば」とのコラボでのオンライン講座を開催。人数に制限がないので、リアルでやるより多くの方の参加が可能。また、境エリアは離れているので、いつもの利用者以外の参加も多く、より広範囲の親子に情報などを届けることができオンラインが有効である。離乳食講座は市でも開催されているが、オンラインにより、実際に食べている様子やスプーンやイスにもアドバイスができることが喜ばれている。

「ひろばで食べよう」

4月から0～1歳の、室内ランチタイムを開放した。まだ保護者と一緒には食べられないが、同じくらいの子どもたちが食べている様子や、食べている物を見ることは、とても参考になる。また、助けてくれる人やアドバイスをくれる人が近くにいることで、不安が解消されたり、イライラすることもなくなったと好評。

2歳以上や大人は、現在は室内での飲食は不可だが、レジャーシートの貸し出しを行い、家族単位でデッキや公園の東屋で食べることができるようにしたので、遊びの間にちょっとしたおやつタイムを挟む利用者もいる。

「利用者を活かす」

一方的にサービスをするのではなく、利用者も一緒に心地よい場づくりをしてきたが、今年度は、「赤ちゃんのぱっちんどめ作り」と「あみ部（赤ちゃんの帽子を編む）」で、それぞれ手芸の得意な利用者に講師となってもらった。また1月にはヨガ講師をしている利用者が他利用者に教えてくれることになっている。

「ひろばを安全で居心地の良い場所にする」(継続)

コロナ禍での出産育児でWithコロナが当たり前となり、感染者数とは関係なく、利用者の活動が広がってきていると感じる。実際、ちょっとした体調不良なら一時預かりを利用しようとしたり、ひろばが混雑していても、以前のように敏感に帰る利用者も減っている。

オンラインのひろば「15（いちご）ひろば」は利用者がほぼ0。かわりに対面の「はじめてのひろば」や、身体に触れる鍼灸師の講座なども人気があった。

一方、まだ警戒を緩められない人もいて、施設としてはどのあたりまで緩和するのが適当かは大変悩む。

「こらぼのコミセン親子ひろば」

月に2回、中町集会所で「こらぼのコミセン親子ひろば」を開催した。コミセンの利用人数制限があるため、予約制は解除されていない。だが、年度途中からネット予約になり、今まで参加したことのなかった親子も増え、以前に比べると賑やかになった。

【一時預かり事業】

- ・本来、家族に体調不良の方がいるときこそ預かりが必要なはずだが、その役割が果たせないというジレンマが続いている。そんな中でも、すくすく泉の一時預かりが安心だと、コロナ前の利用者も久しぶりに戻ってくる例が増えてきた。
- ・日中のニーズは徐々に増えている。特に年末は予約がしにくい時間帯もあった。
- ・事前に面接や聴き取りをして登録をし、当日にも子どもの情報を聴き取り、安心安全な預りを目指してきた。ひろばの親子の中で、慣れない子どもを預かることから、その子、その子に合わせた預かりを丁寧に行った。
- ・担当スタッフが交代した時や、しばらく期間が空いての預かりもスムーズに行えるよう、情報を共有し、記録を残している。
- ・配慮の必要な子どもを預かることも増え、職員はミーティングやノートを活用しながら都度情報交換をした。
- ・外国出身の親の利用に関しても、丁寧にコミュニケーションを取って預かりを行った。
- ・飲食は場所を限定し、子ども同士が対面にならないように工夫した。

【小規模保育事業】

- 小規模保育事業 A 型に移行して1年目。9月から常勤保育士1名を採用し、シフト体制も安定した。
- 保育体制の安定化
常勤保育士が5人体制となった。『いつもいる保育士』との愛着関係ができることで、今までより更に子どもたちが安心して過ごせる日常を保障できた。非常勤職員も安心して補助に入れるようになった。
- 保育観と情報の共有
常勤が違う保育園での保育経験を持っているので、保育観のすり合わせが課題だったので、毎日10分ほどの短時間のミーティングや園内研修で、子どもの読み取りや大事にしたいことを共有した。非常勤職員も含め、保育者同士がお互いの意図をわかって連携しやすくなってきた。
- 1クラス10人の異年齢保育について
常勤の人数が増えたこともあり、昨年度よりも更に一人ひとりのニーズに合わせた保育を柔軟に展開できるようになった。異年齢のかかわりが増えることで多様な刺激を吸収し、人とのかかわる経験の幅が広がった。特に発達がゆっくりな子や家庭的に配慮が必要な子にも丁寧にかかわることができた。

●環境の工夫について

一人ひとりの発達を促すためには、その子の興味や発達に合い、じっくり遊びこめる環境が必要だという考えから、空間のつくり方や遊具について工夫してきた。それぞれが楽しく遊ぶ姿が刺激となり、自分のやりたいことを見つけては一人で、また友達とじっくり遊ぶ姿がよく見られるようになった。

●家庭との連携について

- ・常勤保育士が担任としていつもいることで、送り迎えのときの会話や連絡ノートを通して、日々の姿とともに成長の過程を共有することが信頼につながっている。
- ・コロナ禍の中でも、4月の保護者会を久しぶりに対面で行い、6月の遊ぶ会は保護者同士の交流をメインに行った。また、土曜日のひろばに誘うことで保育室だけでなく地域で子育てする保護者とも話す機会をもてた。自分の子どもの良さに気づき、自信をもてる姿もあった。
- ・ひろばの子育て講演会に参加した保護者からは、人と比べず自分の子を受け入れる気持ちになれた、という感想もあった。
- ・保育参観と面談は、保護者の人数を1人に絞り、保護者が様子に合わせて保育に参加した。我が子の友達とかかわる中で様々な気づきが寄せられ、保育参加は初めての試みだったが、よかった。
- ・園だよりでは写真と共に子どもの成長や園が大事にしていることを伝え、保護者にも好評だった。『おうち文庫』は保護者むけの子育ての本だけでなく、おうちの人と楽しい時間を過ごすための絵本も借りられるようにした。
- ・保護者アンケートでは、一人ひとりに合わせた丁寧な保育についてよかったという記述が多かった。

●研修について

- ・昨年度から引き続き、子どもを信じて見守り、読み取ってかかわることを課題にしている。今年度のテーマを『ひとつの対応について総合的に考えてみる』とし、各自が事例シート持ち寄って話す中で、いろいろな角度から子ども理解を深めた。また、保育者同士がお互いを知る機会となり、一緒に対応を考え、大事にしたいことを共有するなど、総合的に考える視点をもつ経験ができた。
- ・まちの保育園吉祥寺との合同研修を河邊貴子先生を講師に招いて2月4日に実施。『子どもが遊びこめる環境づくり』をテーマに、実際の環境を見学し事例を持ち寄って具体的に学ぶ。
- ・食べることに課題をもつ子がいることで、「食」について考えることの多い1年だった。開設当初から食について相談してきた先生に、改めてお話をうかがう機会もつくり、子ども一人ひとりの状況に合わせた食事について今後も工夫していく。
- ・アドバイザーの先生の視察とひろば保育合同の会議を月1回行った。ひろばも含めたすくすく泉全体のことを共有し、保育について深く話し合う機会となった。
- ・キャリアアップ研修の受講（乳児保育、障害児保育）や市役所の全体研修など、外部研修を奨励した。

●運営委員会について

新年度から始めるICT化への取り組みについての説明を行った。常勤保育士の増員と一人ひとりに合わせた保育が評価された。それぞれの立場からの意見が出しやすい会議になっている。

●今年度は労災は無く、子どもの通院2件があったが、大きな怪我はなかった。子どもが自らの力を知りながら挑戦できる環境を保障するために、一人ひとりの発達に伴う危険要因やヒヤリハットを職員間で共有して、環境改善や職員の配置などに配慮し、安全な保育につなげていきたい。

●仕事の見える化、効率化

保育施設長の仕事の見える化を図り、お互いの仕事を理解して動けるような取り組みを進めている。保育の事務や会議、書類の書式、シフト組などの効率化を見直している。写真販売やドキュメンテーションが作れる機能をもったシステムを来年度から導入することになった。

●まちの保育園吉祥寺との連携

コロナ禍ではあったが、感染対策をしながら芋ほりや節分などの行事を一緒に楽しむことができた。

【達成目標に対する評価・反省】

●3 事業の連携で質を高める

新型コロナウイルスの影響で、未だ保育室とひろばとの職員の行き来は極力減らしているが、施設長が双方の会議に出席したり日々の状況を把握し連絡し合ったりし、連携は取れやすくなった。双方の感染防止の配慮をしながら、できる範囲で、いくつかの合同企画も行った。

- ・ひろば利用者を対象とした企画の講師を「いずみのおうち」の保育士が行い、「パパ講座」「おんぶ講座」を行った。また給食で提供しているスープが味わえるイベント「はじめましてのピクニック」「一本桜のお花見会（3月予定）」を行い、保育園と一体の施設ならではの内容が好評だった。
- ・ひろば主催で講師を招いた子育て講演会には保育園の保護者も参加し、好評だった。保育園の親子が土曜日などにひろばで遊ぶきっかけにもなった。
- ・公園を利用した人形劇、クリスマス会、お正月遊びの会などを、保育室とひろばが協力し合って実現させた。保育の子どもたちも、ひろば利用の親子も一緒に楽しめた。
- ・ひろばのベビーマッサージ、はじめてのひろばと『保育所体験・赤ちゃん触れ合い体験』をセットにして今年度も行った。

●他施設、他機関との連携を深めていく

- ・拠点のネットワークに呼び掛けて合同の職員研修を実現させた。市内の8拠点が今年度から行っている発達に不安のある親子の支援についての学びとして、赤ちゃんの発達と感覚統合について学んだ。
- ・市内の他の施設の様子について情報交換することにより、感染対策と活動のバランスを考えながら進めることができた。
- ・いずみのひろばのプログラムに保健師や助産師を招き、利用者となぐ試みをした。
- ・まだ具体的なことは始まっていないが、地域の高齢者施設や井の頭アートマーケットなどとのつながりができたことで可能性が広がった。

●父親の育児参加を自然に促すためのサポートプログラムを実施する

年に24回の講座や遊びなどのプログラムを実施。それぞれが参加者の満足のいく内容になったと思う（リピート参加やアンケートによる）。育休中や、育児に前向きな父親も多く、3/4以上の父親の参加があった。反省としては、参加者同士のつながりを思っていたほど作れなかったことと、企画準備などの仕事量が多く、他曜日のプログラムを充実させるのが難しく、結果、ママのための企画に職員として不足感が残ったこと。

●多様な子育てに対応できる施設にする

今年度は特に、療育に通う子どもたちの利用が増えた。対応が難しいと思うこともあるが、職員が学んだり情報交換をしながら前向きに対応している。それが伝わったのか、最近では毎日のように利用がある。最初は引き気味の周囲もかなり受け入れて一緒に上手に遊んでいる姿が見られるようになった。危険なこともあるので、スタッフの連携や保護者の協力を今後も求めていく。

●切れ目のない支援の一翼を担う

「はじめてのひろば」が好評で、低月齢からの利用がここから始まることが多い。そこからベビーマッサージや離乳食講座などに繋がっていき、日常的なひろばの利用者となる。助産師の産後ケアからの紹介で利用された方、保健師の紹介という例もある。

●地域とのつながりについて

- ・コロナ以降できていなかった「昔遊びの日」を再開できた。地域のお年寄りにお手玉やメンコ、カンゴマなどを教えてもらったり、みんなで花いちもんめで盛り上がった。参加は5歳～8歳くらいが多く、保育の卒園児も多く参加した。

- ・ひろばでは月に1回の読み聞かせの会に地域のボランティアさんが継続して来ていただいている。
- ・公園で地域のボランティアさんと水やりや花植えをする。
- ・公園では、他園の子どもたちや先生、また井之頭小学校の子どもたちとの日常的な交流がある。
- ・親子の育児の不安や負担を軽減するため、ひろばの0歳児親子に15分ほどの保育園ツアーを実施した。園児が食べているところや生活の様子を見ることができて好評だった。
- ・親子の育児の不安や負担を軽減するため、ひろばの0歳児親子に15分ほどの保育園ツアーを実施した。実際のお皿や離乳食を見て、園児が食べているところを見ることができて好評だった。
- ・デッキから公園にむけて、ひろば親子や保育室の子どもたち、公園に来た人も一緒に、クリスマスやお正月など季節の行事と一緒に楽しんだ。武蔵野赤十字保育園の元保育士が立ち上げた人形劇団『はじめの一步』の人形劇は、6月と3月に公演を行ってもらった。
- ・連携園のまちの保育園吉祥寺とは日々の公園での交流に加え、芋ほりや節分、合同研修会などの交流ができた。
- ・中学生の職場体験を受け入れ、保育、ひろば両方の体験をしてもらった。
- ・地域の接骨院や歯科医院、美容院などで、利用者がすくすく泉の名前を出してくれることから、興味を持って見学に来られたり、新たなプログラムに繋がったりという嬉しいこともあった。
- ・元利用者が支え手としてプログラムに協力してくれた。

●運営体制の安定化と次世代へのつなぎ

9月から1名、8時間常勤が増え、保育室に常勤保育士が5人になった。また、ひろばでは今年度も非常勤スタッフ2名が保育士資格を取得した。

●施設改善

- ・保育室のシャワー、おむつ替え、手洗いなどの場の安全性・利便性・動線を考えた改善工事を行った。
- ・おむつ替え時のプライベートゾーンを他者の視線から守るための衝立を設置した。

【令和5年度以降の見通し】

「新型コロナウイルスの感染防止対策」と、「子どもたちの育つ環境、子育てしやすい地域」とのバランスを取りながら、利用者が安心してのびのびと子育てできる場をつくっていく。

【子育てひろば事業】及び【一時預かり事業】

With コロナの日常となり、感染防止と、子どもたちの発達、親子の心のケア、地域のつながり…どれも大切にしてバランスを取り、ゆっくりと緩和できるところを探していく。また、外国籍、ひとり親、祖父母、障害など、多様な事情のある親子も含め、誰もが安心して心地よく過ごせる場を工夫していく。

- ・育児参加プログラム「Tomony」を土曜日に継続。しかし、昨年度の反省を生かし、単発プログラムの集合体に加え、継続プログラムを企画する。父親が自然に育児に積極的になれるきっかけづくり。ファミリー単位で知り合うきっかけづくり。ひろばを地域の入り口にする。防災意識の向上のための話し合いも加えていく。
- ・昨年度から始めた、子どもの発達へ知識と遊びの提案をする時間「すくすく Time」を継続する。特別なイベント時間ではなく、日々のひろばのひとコマとして取り入れていき、楽しみながら子どもの発達について知るというプログラムである。発達に不安を抱えている親子のための時間という括りで

はなく、まわりの保護者も含めて、みんなで子どもの発達への理解を広げていくことを目的とする。ここでの経験が、インクルーシブな社会の第一歩になることを願っている。

- ・ コロナ禍で行ってきた年齢制限（午前は 0、1 歳のみ）をやめ、年齢にかかわらず午前か午後かを選んで遊びに来られるようにする。30 分間閉所しての清掃・消毒は引き続き行うことにする。それにより、お昼寝時間の関係で遊びに来られない親子や、2 歳になりたての子が急に午前中入れなくなるなどの制限がなくなる。
- ・ 子育て世代包括支援センターとの連携を深め、具体的に利用者に還元できるものを探っていく。
- ・ 子育てひろばネットワークの連携をさらに深め、コラボによる講座やイベント、合同職員研修などを各団体と進めていきたい。
- ・ 地域の力を活かす場面がコロナによって減ってしまっている。今年度も可能なところからボランティアの受け入れや、地域の方も参加するプログラムを増やしていきたい。一旦途切れた関係を新たにないでいくつもりで進めたい。
- ・ スタッフの質向上については、オンラインを活用して、全体研修、ミーティングを続けていくほか、外部研修の受講、関連資格の取得を促すなどして多方面の専門性を引き続き高めていく。
- ・ スタッフの健康管理、場の消毒、換気などを徹底して、思い立ったらふと立ち寄れる安心・安全なひろばを、利用者とともに継続させてゆく。
- ・ 一時預かりは、令和 4 年度には利用が増えてきた。令和 5 年度は、時短や人数制限を解除したい思いもあるがなかなか難しい。預かり人数を増やせばその分スタッフの数も増える。ひろば利用者が増えている中で、一時預かり専用の場所がないので、混んできたら公園出ているのが現状である。早朝や夜間は雇用問題として働き手が減っている。人々の暮らし方の変化もあり、需要そのものも多いとは感じられない。もう一年は新型コロナ感染と社会の状況をみて慎重にいきたい。
- ・ 今までやってこなかったキャンセル待ちについて、どのようにしたら受けられるかを検討している。受け入れ人数を減らしたことで予約が取りにくくなっているのも、カバーできればと思っている。

【小規模保育事業】

- ・ ICT の導入は写真販売から始めて、ドキュメンテーションなども、できることから進めていき、保育の質の向上や保護者との情報共有などに活用したい。
- ・ 給食スタッフの増員をはかり、さらなる安定を目指したい。
- ・ スタッフが子どもの姿やかかわり方について、互いの思いを尊重しながら、色々な感じ方や考え方を出し合える場を今後もつくっていききたい。子ども一人ひとりに合わせた保育をしていくためにも、非常勤スタッフや給食スタッフとの情報共有について工夫していきたい。
- ・ 保護者同士の交流ができる場をつくっていく。
- ・ アドバイザーの毎月の視察や会議、テーマをもった園内研修、またオンラインを活用してキャリアアップの研修や市主催の全体研修など外部に自ら学びに行く機会を作っていく。
- ・ 中高生対象の職場体験、ひろば親子を対象にした『保育所体験・赤ちゃん体験』など、内容の充実をはかりたい。小学生とは公園で場を共有する中からつながりを持ち、必要に応じて小学校とも連携していく。
- ・ 近隣の園とは、合同研修会などを通して、子育てを共に学び合う関係づくりをしたい。特にすくすく泉公園での遊びの連携、充実をはかりたい。